

令和7年度第1回豊橋市立小・中学校通学区域審議会 会議録要旨

- 1 開催日時 令和8年2月12日（木）15時00分～16時00分
- 2 開催場所 教育委員会室（豊橋市役所東館12階）
- 3 出席者 ・委員：芳賀亜希子、河野宏雄、齋藤 啓、村上安仁、岡崎正彦
※敬称略
・事務局：石川 和志（教育部長）
鈴木 大介（教育政策課長）
木全 功（教育政策課主幹）
津滝 敦子（教育政策課課長補佐）
尾瀨 祐介（教育政策課政策グループ主査）
米山 良祐（教育政策課政策グループ主事）
- 4 欠席委員 山本賢太郎、神谷飛鳥、市川晋司
- 5 議 事
進行：事務局 教育部長
(1) 委員の紹介
芳賀委員より順に自己紹介
(2) 役員の選任について
互選により会長に芳賀亜希子委員、副会長に河野宏雄委員を選出
進行：芳賀会長
(3) 所掌事項について
(4) 区画整理に伴う通学区域の改正について
(5) 特定地域隣接校選択制について
(6) 小規模特認校制度について
(7) 学校規模の適正化について
(8) その他

○主な意見・質問等（要旨）

特定地域隣接校選択制について

<齋藤委員>

本制度を利用している世帯であっても、子ども会の行事や防災訓練などは、「住んでいる地域の住民」として扱われるため、「子ども会のイベントは住んでいる地域」で、「学校行事は通っている学校」で、となっています。この状況に対して、自治会や子ども会は工夫をして、費用は人数で按分するなどして校区が異なる子どもでも受け入れてくださっていますが、あの子はなぜ選択先の校区に参加しているのだろうかというような声も伺っています。今後の地域づくりの観点から

みたときに、関係者の間で気持ちの上でも仕組みの上でもズレが生じてしまう可能性があるという課題が常にあると感じています。

一方で、学校にとっては規模の適正化につながっており、今の制度はありがたいとも伺っています。現行制度を維持していくのがよいのだらうと思いますが、地域のコミュニティづくりにおいては、こうした課題を念頭に置きながら運用していく必要があると思っています。

<河野副会長>

20年程前は、吉田方小学校の児童数が1,000人ほどおり、学校が大きくなりすぎてしまうという切実な思いがあってこの制度が始まりました。ところが、近年は少子化に伴い児童数が落ちてきて、あ那时的ような切実感はないのではと思うと、校区の方はどのように感じいらっしゃるのかなと思います。いかがでしょうか。

<斎藤委員>

地域住民の方々には複雑な思いがあるように感じます。学校がプラスになる以上はこの制度を受け入れるけれど、いつまで必要なのだらうという思いは常に持っています。松葉小や花田小は前向きに受け止めてくださっていると思います。吉田方小については、過剰に多いところからは脱していると地域の方も感じていると思います。

<岡崎委員>

制度は異なりますが、嵩山小は小規模特認校として市内どこからでも通える学校です。制度の導入時は、受け入れてくださる校区の方は難しさを感じたと伺ったことがあります。ただ、十数年と継続する中で校区の方も特認校制度を理解してくださっており、夏祭りなどの行事も、住んでいる地区は違っても特認校の子どもたちも受け入れてくださっており、本当にありがたいことだと思います。自治会の方々の理解がないと特認校制度を維持することも難しいと思っています。

<村上委員>

下条小も小規模ですが、防災訓練や夏祭りなどの行事で、子どもがいなくなると困ってしまいますので、校区外から子どもが来てくれることはありがたいことだと思います。下条では、子ども会はなく、夏祭りの費用だけいただいています。隣接校選択制については、小学校にあがるときに、居住校区の学校か隣接校かを選ぶのは親の判断だと思います。親より上の世代ではまた違う考えを持っている方もいて、世代間による考え方の違いがあると思いますが、世代交代をしていかないといけないと思います。

<斎藤委員>

次の世代の方が地域にどう関わっていくのかを考えたとき、小学校のつながりは非常に強いと思います。私がPTAや防災訓練に関わる中で、吉田方校区の子で花田小学校に通う子は防災訓練のときどちらに避難するのか、保護者の方が防災の運営の立場になったときにはどちらに関わっていくのか、といった課題が常にあることを理解しながら運用していく必要があると思います。

特認校制度（小規模特認校制度）について

<村上委員>

難しい問題だと思っています。下条は昔から子どもの数が少ない校区ではありますが、そこから年々減ってきている状況です。今の人数が果たして適切なのか、もっと大人数の方が適切なのか、保護者にもそれぞれの考えがあると思います。個人的には、子どもたちが学びながら他人と比較して自分を高めていく過程で、今の人数ではなかなか厳しいものがあるのではないかと考えています。地域の中でも世代間で考え方は異なっていると思いますが、子どもを持つ親の気持ちを第一にしてもらいたいと願っています。子どもたちの将来を思うと、どちらがよいのか、本気で考えないといけない時期に入っていると思います。

<斎藤委員>

嵩山や下条では、校区外の子どもの地域の方が受け入れてくださっているとのことですが、行事に参加を希望する子どもと保護者がいて、両方とも地域の活動に入っているのでしょうか。

<村上委員>

地域のイベントによります。例えば小学校のお子さんを対象にした行事もあり、夏祭りは自治会でやりますが、参加する人は地域の人に限りません。

<岡崎委員>

嵩山では、子ども会で会費をとって、特認校制度を利用している子ども会の子どもの行事に参加しています。ただ、やはり世代間の温度差は感じます。嵩山小学校の運動場は校区の方の寄附によるものだったり、小学校に対する思い入れも重々承知しています。保護者から直接聞いたわけではありませんが、今より人数が多い方がいいのではないかという意見もありますし、今の特認校制度のように、この人数だからできることもたくさんあります。どういう形がいいのか、校区や保護者の方としっかり話し合いながら進めていく必要があると思っています。

<河野副会長>

特認校制度を利用して、校区外から来ている子にとっては貴重な経験ですし、この制度に救われている部分も多くあると思いますが、いかがでしょうか。

<岡崎委員>

確かに縦割り活動は他の学校より充実します。年上の子が年下の子の面倒をみるのが当たり前で、いろいろな行事も縦割りで行うことも多いです。そういった良さがあるのは事実です。一方、同年代の子たちと色々な経験をするにしても、刺激や競争意識が、大きい学校に比べると少なくなります。子どもの学びとして何を大事するか本当に考えていかないといけないと思います。

学校規模適正化について

<岡崎委員>

特認校制度を利用することで、複式学級にならない方法も考えています。そのために、より保護者の方に周知していただけるとありがたいです。嵩山の魅力ある校区や活動を少しでも多くの

方に目にしてもらって、市内の保護者や子どもたちに興味を持ってもらえれば、児童数が増えることに繋がるのではないかと考えています。空き家が増えているという問題も伺っていますが、多くの人に関心を持ってもらえることを願っています。

<村上委員>

資料の人口推移をみると、とても怖いなと思います。下条もそうですが、新しい人が入ってこないという問題があります。全体的に子どもの数は減っていますが、小さな学校では非常に厳しい状況です。子どもの数を増やすには、若い世代が結婚して、土地を買って家を建て、新しく下条に入ってくれないといけません。若い世代が豊橋市に残らないという根本的な問題があり、それが一番の課題であると思います。難しい問題ですが、先を見て考えないと間に合わない時期に差し掛かっていると思います。

<斎藤委員>

全国的に人口減少が進む中、豊橋ではまちなかに住むことを誘導する施策に取り組んでいます。一方で、若い人が田舎に暮らす魅力や、その地域の文化の魅力を感じて、少し不便だけど良いと思ってもらって、豊橋のどの地域にも小学校が小さくても1クラスはある、というまちづくりの視点はあってもいいと思っています。各地域が発展する中で、そこに子どもも住んでいて、学校も適正規模で運用できる、というような展望をもって、より良い環境にするにはどうすればよいか考えたいと思っています。

<村上委員>

田舎の地域には建て替えができない土地や、宅地として売れない土地があり、新しい人が入って来られない状況があります。そういう問題も子どもの数の減少につながっていると思います。宅地事情も含めて、切実に考えていかないと間に合わないと思っています。

その他について

<芳賀会長>

その他ご意見等はよろしいでしょうか。それでは、以上をもちまして第1回豊橋市立小・中学校通学区域審議会を終了いたします。本日はありがとうございました。